

双燈社と版画教育

Soto-sha and Education in Printmaking

遠 藤 知恵子
(Chieko ENDO)

はじめに

2025年8月30日から10月5日にかけて、長野県岡谷市のイルフ童画館で「武井武雄がつくった組織と仲間たち展」が開催され、画家の武井武雄（1894-1983）が作ったグループとその活動内容、そして彼と共に活動した仲間たちが紹介された。同展で取り上げられたグループは、諏訪中学校在学中の洋画研究会「椰子の実会」（1909年結成）、児童書の挿絵や装幀を手がける同業の画家たちとの組織「日本童画家協会」（1927年結成時の会員は岡本帰一、清水良雄、川上四郎、初山滋、深沢省三、村山知義、そして武井。1961年に新たに同名の協会が結成されたときの会員は、武井、初山、川上、黒崎寿雄、林義雄、安泰、井口秀文）、彫刻家の河村目呂二・すの子夫妻と共に作った自転車の愛好家の集まり「JAZOO-MANIA（ジャズマニア）」（1930年結成）、版画で作成した年賀状を交換する「榛の会（1935年結成時の名称は版交の会。第3回にて改称）」、敗戦後、疎開先の岡谷で結成した文化団体「双燈社」（1946年活動開始）、造本美術の実験の成果である刊本作品を頒布する会「親類の会」（岡谷からの帰京を祝う1948年の「武井武雄先生江戸表復帰記念の会」をもとに組織）などである。2025年の展覧会では、視覚芸術のみにとどまることのない人間関係の広がりを見ることができ、また、ものづくりが人と人との結びつきを生み出したり強めたりすることや、新しい文化の流れを作ったりするということを確認できた。

仲間づくりはそれ自体として形の残るものではないが、作品づくりと同様に創造的な活動となり得る。この展覧会によって得られた、そのような認識のもと、本稿では、武井がグループに参加して行なった活動のうち双燈社を取り上げる。

双燈社の活動は、パンフレット「双燈社の催し」や、武井が筆描きの練習も兼ねて日々の出来事を綴った『気促画帖』によってその内容を窺い知ることができる。そこで、まずはイルフ童画館での調査時に閲覧させていただいた第1回から第6回までのパンフレットにより、催しの内容を概観する。第1回から第5回までの催しに関しては、『気促画帖』にもその様子が描き留められているため、それらのページも適宜参照する。双燈社が地域の人たちに向けて行なった活動を確認した上で、第3回の催し以降、組織された双燈社版画部会に触れていきたい。可能な範囲で図版と共に論じていく都合上、版画部会の活動を詳述するだけの余裕はないが、今後のより詳細な研究に繋げていくためにも、本稿ではまず、双燈社のカラー（特色と雰囲気）や、版画という表現技法がもつ性格について考えることにしたい。

1. パンフレットに見る双燈社の活動

双燈社は、長野県岡谷市西堀（現在の堀之内）の寺院、広円寺境内を活動拠点としていた、戦後の文化団体である。建物疎開と空襲のため1945年に東京を離れた武井武雄は、郷里岡谷の実家に家族を連れて戻り、そこで終戦を迎えた。敗戦後の荒廃した暗い世相を背景に、「これは何とかしなければならない。第一自分自身が闇からまず這い出さなくてはならない」と考え始めた「同憂の士」、武井武雄、八幡竹邨（篆刻家）、武井伊平（諏訪高等女学校教諭。高島小学校で長年教員を務める）、小口吉雄（篤農家）、吉田浄善（吉水浄善。広円寺住職）、武井吉太郎（工場経営。版画、水墨画）、青木貞亮（歯科医）、八幡一郎（考古学者）が立ち上げたⁱ。双燈社同人が集った広円寺は、明治維新後、当時の住職と親しかった武井の祖父一三が「無事学校」を開き、漢学と算術を教えていた。広円寺は地域の文化活動や教育に深く関わってきた寺院である。終戦直後の混乱期には、住職自身も参加する双燈社に活動場所を提供し、地域文化と地域住民の交流を支えることとなる。

オーケストラを呼んで演奏会を行なった「双燈社の催し」の第1回パンフレットの裏側には「△日本を明るくたて直す為にまづ我々自身の生活を少しでも明るくし度い會」「△さうした気持を持ってゐる人なら誰でも大いに歓迎する會」と、△の印でこの催しの趣旨を強調しつつ記している。この国を復興させるために頑張って働こう、ではなく、自分たち自身の生活を明るくしよう、と、要するに楽しむことを呼びかけている点に、この催しの特色を見ることができる。そして、これ以降の実践も考え合わせると、復興につながる明るさ・楽しさは、あくまでも人間らしい文化的な活動や知的な活動によって生み出されなければならないという考えも読み取れる。

双燈社という名称に含まれる「双燈」という言葉は武井の提案で、双燈社同人が話し合いのために集まっていた広円寺の本堂に、二つで一对の燈が同人を見下ろすように鎮座していたことに由来する。武井は、「双燈」について精神文化と物質文化との二つのともしびがあることで文化が成り立つのだと、この名称の意味を説明している。双燈社同人の間で先生のような存在だった武井伊平が「双燈」という言葉に「社」の字をつけて、双燈社という名称になったⁱⁱ。

そのようにして同人が話し合い、「コネのつく限り」ⁱⁱⁱの名士たちを呼び、まず、第1回の催しとして夜の音楽会を開催した。たとえば「音楽の話」をした三輪良三は、諏訪交響楽団ウェブサイト「諏訪響85年のあゆみ〈各期概要と主な活動〉」によると、諏訪交響楽団のもととなった諏訪ストリングソサエティ創立時の中心人物の1人である。下諏訪で歯科医をしていたが、西洋音楽を愛好し、管弦楽の集まり^{iv}をもち、演奏をしていた。

それでは、武井武雄作成のパンフレットから、その活動内容を確認していきたい。

「双燈社の催し」表紙



2025年8月11日調査・撮影 イルフ童画館所蔵資料 © 岡谷市／イルフ童画館

これらのパンフレットは、片面印刷を背中合わせに折り畳むことで冊子風に仕立てられている。ほとんどが片面印刷の紙を4つ折りにしたものだが、第3回のみ、他の半分のサイズの紙を2つ折りにしており、展示作品一覧が印刷されていたと思われる部分は確認できない。切り離し、何かに使用したのだろうか。折り畳んだ状態でのサイズは概ね、縦13.5～15cm × 横9.5～10cm 程度である。謄写版で印刷されているが、題箋は木版で別途作成し、貼付したものと見られる。簡素ではあるが、折りたたんだときに冊子のように開いて読みやすいよう、面ごとの配置が工夫されており、手書き文字も凝っている。

以下、表紙にあたる部分と催しのプログラムや展示作品一覧が見られる部分を確認する。パンフレットからの文字起こしにあたり、下線や字下げなどではできる限りプログラムの記載に従うが、縦書きを横書きにする、一部のカットを省略するなど変更は避けられなかったことをお許しいただきたい。

「双燈社の催し」内容一覧および『気促画帖』の記録

①「双燈社の催し 第一回」昭和21〔1946〕年9月30日午後7－9時／西堀・廣〔広〕円寺

一、挨拶……………武井武雄

一、音楽の話……………三輪良三

演奏會

▲ハーモニカ獨奏〔及解説〕……八幡修一

1 夜霧の馬車……（八幡修一編曲）

2 荒城の月……（同）

3 星條旗よ永久なれ…（スーザー作曲）

▲室内樂〔絃樂四重奏〕……………諏訪音樂協會

第一ヴァイオリン…今井泰男 ヴィオラ 小口耕平

第二ヴァイオリン…橋爪綾子 セロ … 両角俊一

1 スパニッシュ セレナーデ（ビゼー作曲）

2 故郷……………（小学唱歌）

3 小夜曲（第一樂章）（モツアルト作曲）

一、西堀風土記〔第一回〕……………武井伊平

一、挨拶……………吉水浄善

司會 吉水浄善



『気促画帖 四』（1946年5月－1949年5月）より

イルフ童画館所蔵資料

© 岡谷市／イルフ童画館

「双燈社 第一回の催し 音楽會 広円寺にて
来聴三百以上 予想以上の成功なり

九・三〇 P.M.7……9」

プログラムを見ると、解説付きのレクチャーコンサートであることが分かる。聴衆の中には、徴兵や外地からの引揚げのために命を落とした人々の遺族も含まれていたと想像されるが、アメリカの愛国心を象徴する「星条旗よ永久なれ」が解説付きのハーモニカ独奏で演奏されている。弦楽四重奏やビゼー、モーツァルトに紛れて小学唱歌の「故郷」も曲目に含まれ、音楽愛好家もそうでない人も、幅広く楽しんでもらおうとしていることが読み取れる。この演奏会が教育的な意図を多分に含むものであったことは、レクチャーコンサートという催しの形態に加え、演奏後に武井伊平の「西堀風土記〔第一回〕」という、（おそらくは）講演会のようなものが行われていたことから読み取れる。1回の催しごとにテーマは変わっても、西堀の歴史に関わる語りはこの会の一つの軸として連続させていこうという意図が、「第一回」という言葉から読み取れる。「予想以上の成功」と記す『気促画帖』には、正座して音楽に聴き入る人々の姿が描かれる。当時、不足していたのは食糧や物資だけでなく、文化の香りや美しいものへの渇きもまた切実だったことが想像できる。

②「双燈社の催し 第2回 美術展」昭和21〔1946〕年11月15日／展覧会 午前9時－午後4時 懇談会 午後7時－午後9時／西堀・廣〔広〕円寺

第一室 〔素人余技作品〕

- ・ 青木古峯 〔篆刻〕 額・聯・茶櫃
- ・ 八幡猪吉 〔陶器〕 楽 あづまや
- ・ 武井蒼軒 〔篆刻〕 額・屏・筆立〔木工〕 ドウラン
- ・ 青木察治 〔陶器〕 灰皿
- ・ 降旗清二郎 〔竹工〕 油壺
- ・ 増澤國治 〔陶器〕 香爐・花瓶・菓子皿・鼠
唐獅子陶印・水禽陶印・湯呑
- ・ 武井富蔵 〔絵画〕 竹・雀・草風露
- ・ 小口光雄 〔絵画〕 杏村・秋景孤家
處女の髪・コスモス・松林
- ・ 武井吉太郎 〔絵画〕 和尚様・デッサン・蘭
- ・ 三輪良三 〔絵画〕 静物・風景
- ・ 高林秀行 〔絵画〕 顔・小鳥
- ・ 小口吉雄 〔手織品〕 ホームスパン服・同服地
ネクタイ〔写真〕 静物
- ・ 小口智鋭 〔木工〕 煙草ケース
- ・ 武井喜代一 〔木工〕 ドウラン
- ・ 武井 篤 〔写真〕 春光

- ・ 武井武人 [写真] 湖畔
- ・ 小口とく [手織品] ほろ織細帯
- ・ 武井ちか [手織品] 自染自織絹
- ・ 小口花枝 [手織品] 大島緋・けば織上衣
- ・ 武井とみ子 [刺繍] 重掛
- ・ 小池実子 [刺繍] 重掛

第二室 [西堀出身者作品]

- ▲ 八幡郊處 [篆刻] 額面・双聯・小簞笥
菓子皿・筆洗 [絵画] 竹
- ▲ 八幡竹邨 [篆刻] 額面・聯 [絵画] 色紙
- ▲ 武井直也 [彫刻] 女・首・ライオン
観世音像
- ▲ 武井武雄 [版画・エッチング] 地上の祭十二連作
[余技作品] 鎌倉彫手筈・素焼壺・楽焼湯呑
雛人形十五体

第三室 [名家作品] 絵画

- △ 谷 文晁……太公望渭浜乗鉤之図
 - △ 富岡鉄斎……呂洞賓像窩図
 - △ 中林竹洞……峻崖霜禽図
 - △ 川端玉章……春秋山水（双幅）
 - △ 平福百穂……五月初
 - △ 小川芋銭……鐵拐
 - △ 小林古徑……け之
 - △ 山本丘人……山路
-
- △ 岸田劉生……風景
 - △ 丸山晚霞……北信風景・青海の秋

美術懇談會

当夜 7時…………… 9時

- 1 絵の話……………武井吉太郎
 - 2 農民美術の話……………武井武雄
 - 3 西堀風土記（第二回）武井伊平
 - 4 座談会 司会 吉水浄善
- どなたでもおいで下さい



『気俣画帖 四』より

イルフ童画館所蔵資料

© 岡谷市／イルフ童画館

「双燈社第二回の催し 美術展 一一・一五」

第2回は美術展として、作品制作とは別に仕事を持つ人たちの「素人余技作品」、地元出身で作品制作を仕事とする「西堀出身者作品」、そして、その名をよく知られた画家や絵師たちの「名家作品」が、それぞれ別々の部屋に展示される。「素人余技作品」は、絵画や工芸だけでなく、写真や手芸など、幅広い作品を含んでいる。この幅広さが作家たちの作品との一番の違いだろうか。作家と「素人」が截然と分けられることで、両者の違いが際立つ。『気俣画帖』に描かれた展示風景を見ると、画面右下に、武井と見られる人物が展示に背中を向けて煙草を燻らせ、2人の人物と火鉢のようなものを囲んで座っている。作品は部屋ごとに分かれ、第1回のときのような熱気や、聴衆の一体感は読み取れない。とはいえ、美術作品の鑑賞はそもそも静かに行われるものであるため、ここに描かれる風景は普通なのかもしれない。対話や交流の生まれにくい環境であることは否めないが、訪れる人々は腰を屈めて熱心に作品に見入っているようだ。美術展は1日限りの開催で、夜には講演と座談会が行われる。第2回も教育的意図が明確な催しである。

③「双燈社の催し 第3回」版画展と版画講習会／昭和22年〔1947年〕1月19日／西堀・広円寺にて

第一期

版画講習会

1月19日

△ 午前10時……12時

〔講話〕 版画の基礎知識

この時間は申込されない方でも自由
に聴講出来ます。人数に制限
はありません。

△ 午後1時……4時

〔実技〕 実演及実習

(木版・合羽版・芋版)

この時間は各種指導の関係から
申込者先着25名だけに制限します。

講師……………武井武雄

会費……………不要

版画展観覧時間

午前9時－10時 及 午後零時－1時

各一時召つづ二回あります



『気促画帖 四』より

イルフ童画館所蔵資料

© 岡谷市／イルフ童画館

「双燈社の催 第三回 版画展と版画講習会

午前は講義一席 午後実技

二十一歳より六十七歳翁までみんな熱心なのにおどろく
一・一九 於・広円寺」

午前の講義と午後の実技指導、そして展示作品の鑑賞によって、1日かけて版画を体験し、楽しむことができる。会費不要とあるように、双燈社の活動は同人の手弁当で行われる。同人の意気込みもさることながら、それに応じる参加者の意欲には、講師を務める武井も驚いたようである。プログラムの「第一期」の文字からは、継続して版画講座を開講することを初めから計画していたことが分かる。この第3回の催しの後、版画部会が発足して継続的に版画制作と相互批評、作品交換が行われることになる。

④「双燈社の催し第四回 ひなまつり」昭和22年3月3日午後1時－4時／西堀・広円寺にて

一、開會……………小口吉雄

▲ レコード名曲鑑賞〔解説 八幡修一〕

- 1 歌劇ウィリアムテル（終曲） ロッシーニ作曲
- 2 ガボット……………グルック作曲
- 3 コーカサスの風景より「村落にて」イヴァノフ作曲

趣味講座

一、雛の由来と変遷……………武井武雄

同

一、明治中頃の西堀……………武井伊平

一、古典舞踊……………尾澤しげ子

▲ レコード名曲鑑賞〔解説 八幡修一〕

- 4 アンダンテ カンタービレ…………チャイコフスキー作曲
- 5 ハンガリア狂想曲 第二番…………リスト作曲
- 6 メヌエット ニ長調……………モツアルト作曲

余興

一、喜劇 南蠻渡来來の壺〔一幕〕……双燈社同人総出演

▲ お茶の會

一、閉會……………武井吉太郎

〔司會〕吉水浄善

プログラムに記されているのは3月3日当日のレコード名曲鑑賞（解説付き）と講演、舞踊鑑賞と余興であるが、『気促画帖』には、催しに先立って行われた「お雛様を作る会」が記録され、余興として演じられた一幕ものの劇（脚本：武井武雄）に臨む同人の姿が描かれている。



『気促画帖 四』より

イルフ童画館所蔵資料

© 岡谷市／イルフ童画館

「双燈社 お雛様を作る会 二・二七夜

これは反響があり過ぎて集るもの六十余名の超満員先生ヘトヘトになる 広円寺にて」

画面手前には束髪的女性たちが描かれ、また、机に向かって座る女性たちの間に、彼女たちより一回り体の小さい子どもたちの背中も見られる。画面右下にはまだ髪が生え揃わない赤ん坊をおぶった女性も描かれるが、初節句のための人形作りだろうか。「反響があり過ぎ」、「先生ヘトヘトになる」とあるが、それだけ、地元の女性たちのニーズに応える講習会だったことが分かる。

『気促画帖 四』より



イルフ童画館所蔵資料 © 岡谷市／イルフ童画館

「喜劇 南蛮渡来の壺 大黒屋番頭 武井伊平 職人八公 吉水浄善 隣の娘 小口吉雄
和尚 武井武雄 小僧珍念 武井吉太郎 三・三」

3月3日の「双燈社の催し」当日は、解説付きのレコード名曲鑑賞、雛祭りに因んだ趣味講座、武井伊平によるおなじみの西堀の歴史話、古典舞踊と、教育的なプログラムが組まれるなかに、武井武雄脚本による喜劇が「余興」として演じられる。双燈社同人のうち、武井吉太郎、青木貞亮、武井武雄らは、東京で暮らし、それぞれの分野で実績を積んできた。そのため、地元住民から「あの人たち東京へ行って何か偉そうになっているなんて思われちゃこまるんで、やっぱり、こういうバカげたこともやるんだぞ」ということを示そうとしたことが、この「余興」へとつながった。『気促画帖』に、それぞれの役に扮した同人の姿が描かれている。本物の和尚が「職人八公」になり、郷土史の語り部でもある先生が「大黒屋番頭」になり、工場経営者が「小僧珍念」になる。さらには女装姿を披露する同人もいる。どうやって笑わせようかを考えた配役だが、その「笑い」の源には、現実の地位や立場の逆転という風刺の眼差しがある。自らを先回りして風刺し、衣装を脱げば皆同じ生身の身体を持つ人間に過ぎないのだということを表現しようとしたのだろうか。ただ、どのような真面目な意図があるにせよ、この芝居の根底にあるものが「笑い」であり、楽しむことが一番の目的なのだという点は揺るがない。

⑤「双燈社第5回の催し 野外大演奏会」昭和22年6月10日／午後7時〔雨天順延〕／西堀・八幡社境内にて

演奏曲目

▲ 開會

第一部

楽曲解説

- 1 管絃樂 指揮 三輪良三
序曲「バグダッドの太守」…………ボアルデュー曲
- 2 混声合唱 指揮 濱欽哉
A 港……………吉田新太曲
B 埴生の宿……………ビショップ曲
C 野ばら……………シューベルト曲
- 3 管絃樂 指揮 両角俊一
標題曲「玩具の交響樂」ハイドン曲

——休憩——

第二部

- 4 管絃樂 指揮 両角俊一
驚愕交響曲（第二樂章）…………ハイドン曲
- 5 フリュート独奏……………今井光也
- 6 混声合唱（管絃樂伴奏）指揮 濱欽哉
A 雲雀の歌……………メンデルスゾーン曲
B さくら……………日本古謡
諏訪音楽協會 管絃樂部 下諏訪■合唱部 演奏（※）

▲ 閉會

※「管絃樂部 下諏訪■合唱部」は組文字。■は判読困難文字。



『気促画帖 四』より

イルフ童画館所蔵資料

© 岡谷市／イルフ童画館

「双燈社の催 第5回 野外第演奏会

七時定刻より雨は残念

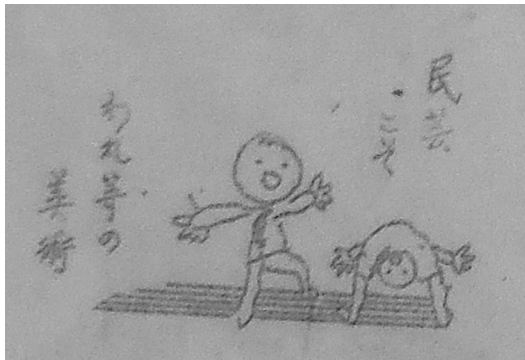
強引に押通す 六・一〇」

プログラムの冒頭に楽曲解説が組み込まれている点はやはりレクチャー・コンサートであり、教育的意図が見られる。とはいえ、野外演奏会の性質上、第1回のような西堀の歴史に関する講話は

なく、1 回限りのイベントという側面が強まっている。『気促画帖』では、1 ページに描ききれない聴衆が画面の端や奥にいくにつれて簡略化され、丸で表されている。オーケストラと合唱という大人数での演奏で、第1 回の室内楽と比べるとかなり規模は大きかったようだ。高々と指揮棒を振るう指揮者と演奏者たちと、あいにくの天気でも傘をさして演奏に聴き入る聴衆との距離が近い。プログラムには「雨天順延」とあったが、実際には雨天決行だった。

⑥「双燈社の催し 第6 回 民芸展」昭和22年10月12日午前8 時より午後4 時迄／西堀・広円寺にて

篆刻	雷音居士（全）……全
篆額……………八幡竹邨	観音像（日本画）…全
杖……………全	茸（版画）……………小口作太郎
杖……………武井蒼軒	花籠（全）……………全
木工品	玉蜀黍（全）……………松井啓良
木刻浮彫煙草入……宮坂昌次郎	風景（全）……………全
美人達磨、獅子牡丹、七福神裸婦	池邊（全）……………蒲生英雄
朝顔……………堀 好人	風景（版画） 武井きよ
竹工品	同（全）……………全
牡丹籠……………佐々木奎三郎	書斎（全）……………浜晴介
薬工品	青い鳥（全）……………中村千尋
花入れ……………古池寿美	道（全）……………武井政博
亀……………全	風景（油絵） 峯村幹夫
染織品	同（全）……………全
ホームスパン三点 小口吉雄	同（水彩）……………全
ネクタイ二点……………全	同（素描）……………全
手織細帯……………小口とく	子供の道（童画） 武井武雄
繪画	寫眞
秋江用釣（版画） 青木察治	奥多摩……………武井政博
瀧（全）……………全	人形
顔（全）……………武井吉太郎	おでかけ……………古池寿美



第6回パンフレット挿絵

イルフ童画館所蔵作品
© 岡谷市／イルフ童画館

作家と「素人」を截然と分けていた第2回的美術展のような区別は設けない。また、版画講習会の成果か、第2回的美術展には見られなかった「版画」の出品が確認できる。

第6回のパンフレットには、「民芸こそわれ等の美術」という言葉とともに、2人の子どもの姿が見られる。「素人」も作家も同じ「われら」であり、同じ「民芸」という作品のあり方（第2回の「素人余技作品」と同様、出品作品のジャンルは多種多様である。この場では技術的なこと以上に「われら民衆の美術」という創作活動の存在の仕方が共有されている）を共有している。第1回から第5回までのプログラムで見てきた通り、演奏会は解説付きレクチャー・コンサートとして行われ、催しのたびに地元の歴史について話を聞く機会が設けられてきた。教育的意図は常に読み取れるが、ここへきて、この「教育」のあるべき姿は、東京で実績を積んだ偉い先生として同人が教えを広めるといったような一方通行のものではないということが見えてくる。地元の人たち自身が地元の文化の主演であることを認識し、各々が得意とするジャンルのものづくりを楽しみながら行うことへと向かっていく。ある程度の成果が見えてきたならば、先生の立場を降り、その集団の1人となって周囲の人たちの間に溶け込んでいく。版画や雛人形の講習会では画家の武井武雄が経験を活かして指導にあたり、特に版画の講習は継続するが、その着地点は、教え子と同じ「われら」として同じコミュニティで表現活動をするところにある。そのようなことが、「民芸」というテーマの選び方やパンフレットの挿絵から読み取れるのではないだろうか。

2. 双燈社と版画教育

第6回パンフレットの挿絵は、両手を広げる2人の子どもの姿で、そのうちの1人は体を正面に向けて画面の外側に視線を向け、もう1人は股の下から視線を送っている。この挿絵に「民芸こそわれ等の美術」という言葉が添えられていることにより、「われ等」すなわち双燈社同人や彼らに賛同して催しに参加する人々は子どもの姿によって象徴されることになる。遊び心を創作活動の中で解放することや、生業はなんであれ制作には純粋な気持ちで向かうこと、そして、『気促画帖』を見る限り、双燈社の催しへの参加者は大半が大人だが「子どもらしさ」にカテゴライズされる遊び心や純粋さを強調する中に、復興に向かう希望が読み取れる。

一度上京して東京で暮らしていた武井武雄・青木貞亮・武井吉太郎にとっては、疎開のため郷里に戻ることは、幼少期の環境にもう一度出会い直すことでもある。先に武井武雄の祖父一三による「無事学校」を取り上げたが、その沿革について、双燈社編『西堀夜話』第1集（1962年）に武井伊平（当時77歳）からの聞き書きが収録されている。無事学校の前身は武井三十郎が始めた「無事庵」と呼ばれた寺子屋で、場所は「お屋敷」「武井さま」と呼ばれた武井武雄の生家だった。1876年の学制発布の折、武井一三は学事係となり、「無事庵」は広円寺に場所を移し、「無事学校」となった。無事学校は、のちに平野村（現在の岡谷市）が運営する小井川小学校となり、現在も地元の児童が通っている。広円寺にはもう一つ、西堀の大地主八幡氷湖こと八幡仲次郎が明治中期に開いた夜学（漢学塾）があった。氷湖が病気になって塾が閉鎖されると、元塾生の青年たちが自主的に夜学会を行う。この自主的な夜学会を武井武雄の父慶一郎が自宅で引き受けて武井家塾を開き、小井川小学校の宿直の先生に頼むなどして塾生に学習の場を提供した^{vi}。『西堀夜話』第2集（1964年）には武井家塾の記念写真が載っており、その写真には青木貞亮、小口吉雄、武井武雄の3人の同人が写っている。なお、先の『西堀夜話』第1集によると、武井伊平はこの塾で諏訪中学校在学中に英語の初歩を教えるなどの手伝いをしていた。第2集に収録された座談会には、元塾生の同人の回想が収録されているが、小口吉雄によると、武井家塾では学校の復習をしたり、剣道、英語、漢文を学んだりし、正月には加留多会をした。青木はさらに、肝試しやスピーチの練習をしたことを振り返っている^{vii}。このように、明治初期から中期にかけての広円寺や武井家で展開された学習支援やレクリエーションの活動を、双燈社同人のおよそ半数が経験していた。双燈社の教育的側面の原型の一つとして、このような塾での経験があったのではないだろうか。そうだとすれば、双燈社の活動は彼らにとり、一種の原点回帰だと考えることもできる。幼少期の経験を、今度は主催者側の立場に立ってなぞっていくことにより、自分たち自身も生活再建に向けた力を取り戻していく。民芸展で作品作りや展示に取り組む「われ等」を象徴する子どもの絵姿は、双燈社の活動をする彼ら自身の姿にも重なる。

後年、双燈社版画部会で学んだ小学校教諭の増沢莊一郎（1914-1985）の尽力により、「第一回全国版画教育研究大会」が1954年に開催される。『諏訪』第10号（1970年5月）に掲載された講師団の写真には、恩地孝四郎、太田耕士、関野純一郎らといった豪華な顔ぶれが見られる。増沢によると、大会開催の発端は太田が増沢に声をかけたことだが、武井武雄の友人でもあるこれらの版画家たちによる支援があったことも見逃せない。さらに、工場経営者でもある双燈社同人、武井吉太郎は工場でエッチングプレス機を製造して提供したという^{viii}。同人が帰京した後も、物心両面の二つの燈は健在だった。

今後の課題

今後の課題は、創作版画のもつ歴史性を踏まえた上で、双燈社版画部会および増沢莊一郎に関する更なる調査を進めることである。たとえば「第一回全国版画教育研究大会」の講師の1人、恩地

孝四郎の伝記を書いた池内紀は、油絵と版画を次のように比較する。

油絵が主としてブルジョワの子息たちの優雅なたしなみであったのに対して、版画は板と小刀がありさえすればできる。[略]ここに誕生する一点の作品はおのずと絵画にひとしく、しかも刻みや摺りに無限の変化をつけられる点で、絵画よりも何倍かの創造性をもっている。そのしなやかな特性によっても、権威に硬直しがちな絵画とちがって、はるかに自由に現代と対応できる。^{ix}

宮内省勤務の父をもつ恩地も油絵を描いていたが、1931年結成の日本版画協会のまとめ役となつて、講習会などを通じて版画の創造性を版画家の卵たちに伝える役割を担っていた。版画はお金をかけなくても制作でき、新しい工夫を自分自身で次々と付け加えていくことができる。「しなやかな特性」は「自由」と読み替えることもできるかもしれない。その道の権威が示す規範も絶対的なものでなく、自分自身の考えを活かすことができる。

双燈社版画部会の講師を務めた武井武雄もやはり、版画の民衆芸術としての側面を重視し、1970年の時点で次のように述べている。

年賀状だけをやる版画人口は大変なもので、どんな山家にも一枚くらいは版画の年賀状が届くのである。これは学童が版画をやっているからで、浮世絵を生んだから日本は版画国というのではなくて、大衆の中に溶け込んでいるからこそ版画は日本の国技とっていい事になるのである。^x

学校での図画教育を通じ、版画が普及することを歓迎する文脈で書かれた一節である。「年賀状だけをやる版画人口」への言及は、賀状交換会を組織していた武井ならではと言える。確かに、喜多川歌麿や東洲斎写楽、葛飾北斎などの有名絵師の代表作は日本という国を連想させる一種のアイコンのような存在ではある。彫師や摺師の技術も高く、武井自身、伝承木版の技術者との協働により、作品を作っている。だが、作品制作を職業としない人々による版画表現という、裾野の広さこそが、この国に生きている私たちの創造性の一つの側面を特徴づけている。そんな考えが読み取れるのではないだろうか。

版画の技法それ自体はあくまでも表現の技術であり、恩地や武井の思いとは別個に存在する、それ自体独立したものである。ただ、その普及運動を行なった人々の間には確かな信念があったこと、権威への志向とは別の流れがあったことは確かである。一つの時代、一つの作品群を形成していった彼らの基本姿勢を踏まえ、双燈社がもたらしたその後の影響を明らかにしていくことを、今後の課題としたい。

- ⁱ 武井武雄「双灯社と版画」『諏訪』第10号、1970年5月、2ページ。八幡一郎の名は第1回のプログラムに記載されている。第2回以降のプログラムには八幡の名前は見られず、『気促画帖』にも八幡が登場することはないが、明治期の西堀に関する聞き書きを主な内容とする『西堀夜話』第二集（双灯社編、1963年）では八幡の名を確認することができる。同人の職業については、岸田恵理『信州風景画万華鏡』（玲風書房、2014年）224ページの記載も併せて参考にした。なお、双燈社の漢字表記は常用漢字ではないため、資料が作成された年代によっては「双灯社」と表記されることがある。本稿では、基本的には結成当時の「双燈社」の表記を用い、引用文では引用元の表記に従うこととする。
- ⁱⁱ 前掲書（武井、1970年）3ページ。
- ⁱⁱⁱ 前掲書（武井、1970年）3ページ。
- ^{iv} 諏訪交響楽団ウェブサイトより、「諏訪響85年のあゆみ〈各期概要と主な活動〉」<http://www.suwakyo.com/history/history.html>（2025年11月19日確認）。このページには、諏訪ストリングソサエティ誕生前、「大正12年〔1923年：引用者〕上諏訪に関貞英、立木茂、三輪充武、土橋由衛など文化人グループを形成して弦楽アンサンブルをスタートさせた」との記載がある。同一人物と言い切れるような確証はないが、1909年、諏訪中学校の生徒たちが結成した絵画サークル「椰子の実会」メンバーに、「立木茂」という生徒が会計担当として名を連ねている。今後の調査を通じて明らかにしていきたい。
- ^v 「大型インタビュー 永遠の夢とメルヘンの世界を描く 童画家・武井武雄さん」聞き手：編集部（『オール諏訪』創刊号、1981年4月、30-43ページ）43ページ。
- ^{vi} 双燈社編『西堀夜話 第1集 明治時代の西堀を語る』双燈社、1962年、11-13ページ。
- ^{vii} 双燈社編『西堀夜話 第2集 西堀の今昔を語る』双燈社、1964年、16ページ。ここで青木が語る肝試しは次のようなものである。「寒中雪の夜九時—十時と云う人通りも稀れになった時刻に、お墓の真中、お寺の縁の下等を歩かせて、驚かせて見たり、咄嗟の異変に耐える鍊磨などもやつたものです。」また、スピーチの練習は「塾での談論会（話方の練習）」で、「幼い吾々が人前で演壇に立つて辯舌の練習をやつた事です。これには武井翁夫妻が立会われた後に講評されて教えられた事は後々の為に貴い訓育であつた」と振り返る。
- ^{viii} 増沢莊一郎「諏訪版画小史—版画教育十五年の歩み—」（『諏訪』第10号、1970年、8-40ページ）12ページ、16ページ。
- ^{ix} 池内紀『恩地孝四郎——一つの伝記』幻戯書房、2012年、65ページ。
- ^x 武井武雄「双灯社と版画」（『諏訪』第10号、1970年5月、2-7ページ）7ページ。

本稿執筆にあたり、資料の閲覧・撮影をお許しくださったイルフ童画館と画像の使用を許諾いただいた岡谷市、そして手続きをしてくださった職員の皆様に心より御礼申し上げます。